

野 雪 隠 風

山 路 茂 則

I. はじめに

本稿は、快適なトイレとはどのようなものであるのかについて思いをいたし、理想的なトイレを実現すべく取り組んだ実践レポートである。個人宅はもちろんのこと、観光施設のトイレづくりの参考になるであろうと考えて、ここに報告するものである。

II. 見直される場所

読者諸賢は便所のことを何と称しておられるであろうか。おそらく「トイレ」「お手洗い」が一般的ではないかと思う。明治生まれの祖父は「はばかりへ行く」とか、「ちょっと高野山にお参りしてくる」などと言っていた。その昔のトイレ（というよりは、「便所」と称した方がふさわしいと思うのだが。）は汲み取り式であり、臭い・汚い・暗い・怖いと4Kが揃っており、まさに口に出すさえ「はばかり」場所であった。トイレをなぜ「高野山」というのかといえば、これは大阪のシャレ言葉である。和歌山県の高野山は僧侶としての修行をする場であり、そこでは髪を剃る（落とす）。一方、トイレでは用が済むと、後始末の紙を落とす。「髪」と「紙」、「剃る（落とす）」と「落とす」というところからきているのである。

トイレの異名はどれくらいあるのだろうか。閑所、お手水、雪隠、後架、思案所、下屋、箱場、分別所、奥の院、セコ場、消防署、百番……。芸能人、商店員、学生等が使用する隠語も含めると、軽く200から300はあろう。

このように隠語を使用し、なるべく口にしないのが奥ゆかしいとされてきたトイレ、汚いものの代名詞のように扱われてきた場所が、近頃では見直されて、とりわけ百貨店では豪華なものに改装し、女性客のご機嫌を伺って財布の紐を緩めさせる作戦を展開しているのである。

福井県越前海岸の観光レストハウスは、駐車場に「日本一のトイレ」と大きく書いた幟を林立させ、トイレが綺麗なのを売り物にして、集客に努めている。「日本一」の中身はどのようなものなのか。そこでは「松籟」「竹軒」などと命名した4、5畳分の個室の内部に、飛び石、石灯籠、植栽を配し、川のせせらぎや小鳥のさえずりのBGMが流れ、あたかも自然の中で用を足している風を演出している。このトイレをデザインしたテレホンカードも販売しているほどの力の入れようである。

個人の住宅でいえば、かつては居室優先で、トイレには最小限のスペースを充てるという考え方であった。しかしながら、生活水準の向上と健康志向が相まって、昨今では排泄のために必要な場としてだけでなく、居室と同程度に大切な場所として認識されている。用がなくても気分転換に入る人や、本棚・テレビ・ステレオを置いて、トイレタイムを楽しんでいる人もいるほどである。



写真1 テレホンカード「松籟」



写真2 テレホンカード「竹軒」

Ⅲ. 至福の一刻

十年一昔というから、もう三昔、いや四昔も前になるであろうか。昭和20年代から40年代前半にかけて大阪市内の蒲生町に住まいしていた。戦災を逃れた地域で、昔ながらの住宅が残っていた。そのトイレは縁の突き当たりであり、蹲ると目の前が引き違い式の大きな窓になっていた。明かり採りのためと、汲み取り式であったので換気を兼ねていたのだろう。窓を全開しても、周囲に高層建築は皆無だったので、他所から覗かれる心配はなかった。いつも窓を大きく開け放して、早春は闇に漂う梅の香、梅雨時は雨にうたれる紫陽花、そしてまた仲秋の名月といったように、四季折々の風情を肌で感じながら、ゆったりとした心持ちで用を足したものである。

『断腸亭日乗』は文豪・永井荷風の日記である。その大正7年（1918）正月16日に、トイレの窓から見た庭の様子を書いている。

毎夜月あきらかなり。廁の窓より夜の庭を窺見るに霜を浴びたる落葉銀鱗の如く月色水の如し。寒気骨に徹す。

また、同年11月15日には

階前の蠟梅一株を雑司ヶ谷先考の墓畔に移植す。夜半廁に行くに明月昼の如く、枯れたる秋草の影地上に婆娑たり。（後略）

荷風も用を足しながら、トイレの窓を通して四季の移り変わりを敏感に感じ取っていたようである。

筆者は平成の現在、緑豊かな郊外に住んではいるものの、周囲は住宅が建ち並び、それも2

階建が大半なので、トイレの窓を全開にして使用するのは不可能である。それでも何とかして、自然を愛でながらトイレタイムを過ごせる方法はないものだろうか。欲をいうならば、「野雪隠」を再現できないものかと考えていた。野雪隠の爽快さは、山歩きを好む人なら覚えがあろう。青空の下、悠々と流れ行く白い雲を眺めつつ草むらにしゃがみこむ、また、小川のせせらぎを耳にしながら快く排泄する至福の一刻を。

建築家の富田玲子は「建築家から見たトイレ」(『女たちのトイレ』所収)の中で、次のように記している。

私になつかしく思い出すのは、かの有名なヨセミテ公園の草むらの中で、野糞をしたことだ。しかもそれは、観光客で一杯の目抜き広場からほんのちょっと離れた草むらであった。空が抜けるように高く青く、人びとの声が心地良く聞え、高い岩壁がまばゆかった。(中略) 都市の生活の中で、みんなが野糞をするのは果たせない夢だけれど、四季の感覚、時間の感覚、天地の感覚を呼びさますような空間がほしい。

堪えていたものを排泄する、しかも大自然の真っ只中で。富田嬢もさぞかし至福の一刻を過ごしたことであろう。

あたかも自然の中で悠々と用を足しているかのような気分を味わえる、そんなトイレが欲しいものと、常日頃から思案をし続けていたところ、幸いにも先年、老朽化した拙宅を建て替える運びになった。この絶好の機会を逃すことなく、念願の快適なトイレを実現させようと、設計を試みたのであった。

IV. 野雪隠をつくる

1. 設計

建物が地形的に他人の目に入らないような場所、例えば崖の上であるとか、湖のほとりであるならば設計はたやすいが、一般の住宅地内において、トイレの外の景色を借景に取り込むことは至難の業である。

そこでまず考えついたのは、坪庭を設け、それが見えるトイレを設置してはどうか、という案である。記憶違いならお許し願いたいですが、フジタ工業本社ビルの男性用小便所の一部は、総ガラスの壁に向かって用を足す仕掛けになっているらしい。ガラスの向こうは庭園である。これがヒントになったのであった。

早速、建築業者に提案してみると、

「そりゃあ、商売ですから喜んでさせていただきますが、これは高くつきますよ。坪庭をつくるとなれば屋根の面積が増え、それに家の形状も複雑になります。ですから建築費がグーンと上るんです。トイレのためだけに多額のお金をかけるのでしたら、もっと他の部分につき込んだ方がよろしいのではないかと」

「そうかも知れんけど、まあ、一度見積もりをして欲しい」と依頼して出てきた書類を見て驚いた。ハンパな額ではなかったのである。で、本案はあっさり却下となった。

よし、それではガラスに替えて、マジックミラーを嵌め込んで如何。刑事もののテレビドラマからの発想である。そうすると、トイレ内部からは外の景色が見えるけれども、外部から



写真3 トイレ内部



写真4 トイレ外部

は中が見えないではないか。ところが、夜間にトイレ内部で照明を点けると、外から丸見えになると指摘され、またまた却下である。

ならば第三案。それは昔なつかしい「掃出窓」からヒントを得た。

若い人はご存知なかが、汲み取り式が全盛の頃、換気と掃除を考慮して、床面すれすれの部分に引き違い式の小窓を設けていた。これを「掃出窓」と称した。この窓を開け放しておくと、風が流れて換気できるし、床掃除も楽である。時として、庭の雨ガエルやコオロギなどが出入りしたりもした。もっとも、この窓から盗人が侵入したり、痴漢が覗き見したりした、というような防犯上の問題も生じていたけれども。

この「掃出窓」の拡大版を防犯対策も十分に施して設置する、という提案をした。

「これでしたら、それほどの追加費用も発生しないかと……。しかし、こだわりますねえ」感心したのか、あきれたのか、なんともいえない顔をしていた。

そこで、写真をご覧願いたい。

ペーパーホルダーの大きさから、窓の広さを推測していただければ、ガラス面の縦は約 36 cm、横は約 72 cm となっている。開閉式にして外気を導入したかったのだが、防犯上、複層ガラスを使用したはめ殺し式としている。

次に、トイレ内外があたかも繋がっているかのように、一体感を持たせるための仕掛けについてである。当初は、内側に土を入れて本物の植物を用意しようと計画したが、水遣りをした際に湿気が発生し、衛生上の課題が残ると思われたので、このアイデアは没とした。湿気がまずいとなれば、乾式にするよりほかはない。そこで、窓の内外に白い小石を敷き詰め、連続性を確保することにした。加えて、外には彩りに常緑草を植えてみた。

他所からの視線を遮断する手段としては、道路側に板塀をイメージした目隠しを取り付けた。

2. 完成

トイレに座ると、蟻が白い小石の上を這って行くのが見える。落葉が舞い込んでくる。やわらかな陽が射し込んでくる。まさに野雪隠の気分である。

だが、なにやら違和感を覚えるのはなぜだろう。どうやら、その源は「腰掛」便器にあるらしい。というのは、野雪隠では蹲るからだ。それならば和式にしておけば良かったのかといえ、そうでもない。野外での用足しを想起していただきたい。小水は枯葉を濡らして地中にし

み込み、風に揺らぐ雑草が裸の尻をくすぐる。遠くで野鳥の鳴き声がある。こうした自然との一体感が野雪隠の醍醐味なのであるから、これを密閉されたトイレという空間で実現しようとするのは、到底不可能なのである。

そもそも原点に立ち返ると、野雪隠とは「便所の設備のない野中で用を足すこと」をいうのであるから、トイレという設備を設けること自体が不自然といわなければならない。それゆえに完成したトイレは「野雪隠」ではなく、「野雪隠風」なのである。

3. 補足

谷川を挟んで 150 m ほど先に見える高代寺山は、桜花・新緑・紅葉・新雪と、季節ごとにその姿を変化させる。これをなんとか借景に出来ないものかと熟考した結果、2階のトイレの窓を工夫することで解決した。すなわち、座った時に首から下は隠れる高さまで、窓を下げて設けたのである。但し、身づくろいをする際には、窓の開け加減に留意しなければならない、という気遣いは必要である。



写真5 2階トイレからの風景

V. 結 び

5月の連休に奈良市内を観光した。某有名寺院には観光者が押し寄せ、多額の拝観料収入を獲得したことであろう。しかし、境内のトイレは汚れており、かつ水浸しであった。これでは、仏の教えのありがたさもふっ飛んでしまう。

同じ日に訪れた京都府当尾の里に所在する浄瑠璃寺のトイレは、手入れが行き届いており、汲み取り式ながらも気持ちよかった。土足禁止となっていて、用意されているスリッパに履き替えて入室すると、“汲み取り式です。財布やキー・ホルダーを落とさないように”との注意書きも親切で、微笑ましい。紅葉の秋には、また来ようと思った。

観光にはトイレがつきものである。既述したように、「野雪隠」は爽快な気分を得ることができる。人口過密の現代において、本物の「野雪隠」はできない相談であるが、「野雪隠風」のトイレは設置可能である。トイレそのものが観光資源となるような、そんなトイレづくりを願うものである。

参考文献

- 『荷風全集 第19巻』永井荷風 岩波書店 1964
- 『女たちのトイレ』TOTO 文化情報センター編 泰流社 1987
- 『日本のいいトイレ』日本トイレ協会編 地域交流出版 1993